

資料涉猟余話 その30

このときの帰郷がきつかけになったのだろうか、翌昭和15年7月下旬から9月18日までの一夏を、日夏は伊賀良村大風で過ごすことになる。この避暑生活については「山荘記」「山荘日記」「水鶏の宿」に詳しい。昭和17年5月発行の『風塵静寂文』の「制作年譜」によれば3篇とも翌昭和16年6月から7月にかけて『中外商業新報』『短歌研究』『文芸春秋』にそれぞれ発表され、全集にも収載されているので容易に読める。

日付は特定できないが、「山荘日記」には来峡から山荘に落ち着くまで、「山荘日記」「水鶏の宿」は8月1日以降の避暑先での生活の様子を描かれている。

日夏50歳の夏である。

7月下旬のある日、「朝の準急で新宿を発する」辰野の箕輪屋で昼食をしたため、三田切を渡ると懐かしい下伊那である。「下伊那に入っ

黄眠先生が行く

「山荘記」より

3

嶋 不濁

て昔の同窓の川ドクトルが乗り込んできた。それらの人や山妻女中には飯田で別れて、単身天龍峡駅に降りて天龍峡ホテルに泊まる」とある。日夏は一人天龍峡の景物に触れ「天地有情の挨拶」を交わす。翌朝を右岸の公園の散策、天龍峡焼きの篆刻などに蘊蓄を垂れ、コンクリートになった故射橋に「何にしても今日の時

代の下級価値を象徴するものがコンクリートと浪花節」などと皮肉を述べている。宿に帰って昼食をとり、また土産物屋を素見す。「陶齋といふこの焼物今日の巧者が作った白焼涼爐があつて、あくどい上絵を避けて白いま、篆刻文様だけで形

て山妻と女中とが迎へに来てくれた」とあり、日夏が明日から住まう山荘の準備に添と女中をやつて、自身は天龍峡ホテルでぶらぶら時を過ごしていたことがわかる。これは引越しのたびに繰り返されたであろう光景で、この坊ちゃん気質は終生変わらなかつた。

早めの夕食をとり、天龍峡駅から飯田駅まで行き、山荘までは自動車を呼ぶことにしたが、自動車は「喬木の多い村社の前を通つて、一段とけはしくなる赤土の山径の途中で止つた」。「日本中央雪嶺南端育良山」の山荘の麓に辿り着いた。「久病六年快気この方、こんな坂道を登つたことは一度もない。こんな道を登ればすぐに心臓があえいで、それにつれて心悸亢進の発作が神経症的に起るのが昔から

の常だつたが、今はそれが全くない。ないけれども、疲労は依然として激しい。齢をとつたそれだけ疲労感が一段とひどくなつた」と、自身の体調には鋭敏だが、その坂を荷物を持って二日間二往復、日夏を天龍峡まで迎えに行つた妻や女中の疲労には思いが至らない。自動車を捨て、日夏は山荘への山道を登り出した。登場する川ドクトルは川島甫、陶齋は萩元陶齋、村社は育良神社、自動車が止まつた赤土の前は宮下氷屋跡であるが、地元の人にしかわからない書き方である。



日夏耿之介全集